



つかさ会の皆様、こんにちは。ここ、岐阜大学医学部附属病院付近でも降雪が見られましたが、いかがお過ごしでしょうか。コロナ禍の最中と比べると、今年はつかさ会のイベントなどで皆さまにお会いできる機会が多く、より交流が深まったような気がしています。今年も残りわずかですが、ぜひ楽しい年末年始をお過ごしください。

さて、最近、「糖尿病」という呼称を変えていこうという動きがあることをご存じでしょうか。近年、糖尿病の治療は飛躍的に向上し、一病息災を実現する人が増えました。それでもまだ、糖尿病への誤解や偏見のために、就学や就職、結婚、マイホームの夢を絶たれる人がいます。

糖尿病について正しく知ることは、糖尿病のある人へのやさしい理解につながります。毎月皆様にお届けしている、「さかえ」を発行している「日本糖尿病協会」や専門の医師らで作る「日本糖尿病学会」は、「糖尿病」という病名が病気の実態を示しておらず、「尿」と名前がつくことからイメージも悪いとして、呼称変更を提案しました。

このことにつき、皆様にアンケートをお願いできましたら幸いです。詳細は同封するアンケート用紙をご覧ください。用紙に記載しております2次元コードより、スマートフォンなどでアンケート入力フォームにアクセスし、ご回答頂ければ幸いです。万一、入力ができない場合には、同封のアンケート用紙にご回答いただき、FAXいただけますと幸いです。

もう1通、国立医療研究センター病院からの依頼アンケートも同封しましたので、お手数をおかけいたしますが、合わせてご協力をお願いいたします。

また、1月6日に開催予定の市民公開講座のお知らせも同封いたします。当科の堀川幸男先生にも糖尿病と遺伝についてご講演いただきます。糖尿病以外にも、最新の医療と遺伝についてのトピックを、その道の専門の先生方がご講演される予定です。ぜひご参加ください。

ここからは、今月号の「さかえ」の読みどころ紹介です。

特集1は「糖尿病と心不全の深い関係(P.5)」です。心不全は、「心臓がわるいために、息切れやむくみが起こり、だんだんわるくなり、生命を縮める病気」と定義されます。近年、高齢の心不全患者さんが増加しており、高齢化社会を迎えた我が国において、心不全は今後も増加すると推定されています。糖尿病と心不全の関係や、糖尿病の治療薬であるSGLT2阻害薬と心不全について、わかりやすく解説されています。

特別企画1(P.33)は、糖尿病の合併症の一つである糖尿病腎症と透析導入について掲載されています。腎臓の中には、「糸球体」と呼ばれる、血液中の老廃物をろ過して尿をつくる、「ざる」のような装置が付いています。血糖値や血圧が高くなると、糸球体に傷がつき、「ざる」の網目に穴があいた状態になり、尿のなかに「アルブミン」という蛋白質が漏れ出てきます。これが、糖尿病腎症の始まりです。血糖値や血圧がうまくマネジメントできていないと、糸球体が減り、老廃物が捨てられなくなり、最後には腎不全になります。腎不全になると、透析や腎移植が必要になるといわれています。1998年には糖尿病腎症が日本の透析導入原因の第1位となり、急速に増加しましたが、糖尿病治療の進歩により、最近では少しずつ減少に向かっています。糖尿病腎症の予防と治療、そして透析ゼロを目指す取り組みについて解説されていますので、是非知識を深めていただければと思います。

年末年始は何かとイベント事が多くなりますが、お互いに生活リズムを崩さないように心がけ、楽しく過ごしていきましょう。